◆研究発表会　議事概要◆

【ご挨拶（西東京市教育委員会教育長　木村俊二様)】

令和２年度から新学習指導要領が全面実施となります。新学習指導要領では、学校教育全体で目指す資質能力を明確にし、教科等の垣根を超え、地域の環境や人材を活用し、特色のある教育活動を充実していくために編成したカリキュラムを絶えず改善していくカリキュラムマネジメントが求められています。

そのような中、本校では、カリキュラムマネジメントを通した授業改善、国語の話す力・聞く力を研究主題に掲げ、他者と協働し課題を解決する力を育成してきました。その成果はさきほどの公開授業において、教科の枠を超えて本校が取り組もうとする力の育成に向け熱心に指導する先生たちの姿や、子供たちの意欲的な学習の様子からも拝見することができました。大変落ち着いた素晴らしい授業、子供たちが自信をもって発表する大変素晴らしい授業だったなと感じました。

【指導講評（西東京市教育委員会教育部教育指導課長　内田辰彦様)】

多様な実践を見せていただいた公開授業では、本校が児童や地域の実態を適切に把握した上で、重点的に育みたい資質能力を、他者と協働し課題を解決する力、それを各学年の発達段階や各教科の特性に応じながら育成し、国語科の話すこと聞くことを軸にしたカリキュラムマネジメントの推進に取り組まれたことが、先生方の指導や子供たちの学ぶ姿から感じ取ることができました。

さて、これから予測困難な時代になるといわれ、そういった社会で生き抜く力を子供たちに身に付けさせるために、我々教師は、子供たちが習得した知識を使い前例のない課題に対応したり、他者と協働して解決したりする力をつけていくことが求められています。

そこで、１時間の授業が、年間指導計画の中でどう位置付けられているか、他教科とどう関連付けられているか、また、地域の人材をどう活用するかなど常に計画的に評価改善していくいわゆるカリキュラムマネジメントが求められています。

本校では、カリキュラムマネジメントを研究する上で２つの視点を持って取り組んできました。カリキュラムマネジメントの３つの側面である「教科等横断的視点」「PDCA サイクルの確立」「人的物的資源の活用」この３つを意識した視点の取組と、国語科を軸にした学校全体の言語活動の充実に向けた視点の取組、この２つを軸にした研究を行ってきました。このことを踏まえ、本校の研究の視点に沿った話をしていきたいと思います。

まずカリキュラムマネジメントの３つの側面を意識した取組です。

児童や地域の実態や教育目標を受け、学校全体で身に付けさせたい力を、他者と協働し課題を解決する力とし、その力をどう効果的に身に付けさせるかを考えてきました。

１年次では、他者と協働するためには、自信をもって話したり、相手意識をもって聞いたりできるよう、国語科の話すこと・聞くことの指導について研究を進め、２年次では、国語

科の話すこと・聞くことの他教科等との関連を研究して、国語科の話すこと・聞くことを軸にした教科等横断的な年間指導計画だけでなく、他教科他領域との関連図を作成して教科の枠を超えた狙いや教科同士の関連を意識し学びにつなぐことができるようにしました。例えば、３年生の国語科で学んだ発表の仕方のモデルを総合的な学習の時間でも同じような発表の仕方にして、児童が積極的に他の領域で学んだことを発揮できるようにしました。

このような取組を行う上で、本校の先生方は、職員室に貼った年間指導計画に、気付いたことを随時記入し、年間指導計画の修正・改善を常に行うほか、研究に関する夕会である研究夕会を設定して、タイミングを逃さずに研究の評価改善を行ったりするなど、先生方がいつも PDCA サイクルを意識できるように工夫してきました。

このように、児童に身に付けさせたい資質能力を、計画的に効果的に達成させるため、俯瞰的な視点を持って、一つの目標に向け、学校全体が地域とともに常に教科等横断的な視点に立ち取り組んできたことは、まさにカリキュラムマネジメントの推進であると言えます。

本校の研究の視点の２つ目は、国語科を要とした、言語活動の充実です。国語科で学んだことを他教科等で活用することができるよう、言語活動を充実させるための手立てについて研究を進めてきました。教科横断的な視点に立ち、教科の枠を超えて目指す児童像を求め、発達段階に即した言語活動を充実させる手立てを考えてきました。本日の授業でもその手立ての工夫をいくつも拝見できました。

本校が、学年、教科の縦と横の枠を超えて、学習内容を見通し、配列の工夫や教科の特性に応じた手当の工夫に取り組まれたこと、そして地域や保護者の方とともに、同じ目指す児童像を共有して、社会に開かれた教育課程を行っていったこと、それはカリキュラムマネジメントの推進を図るための一つの方向性を示す大変貴重な研究であったと考えています。

【鼎談（テーマ：カリキュラムマネジメントへの挑戦）（講師　大妻女子大学家政学部児童学科准教授 樺山敏郎先生　明星大学教育学部教育学科客員教授 邑上裕子先生】

〇学校におけるカリキュラムマネジメントとはどのようなものでしょうか。

（樺山先生）「社会に開かれた」ものであることです。学校の取組が、教室から学年全体、学校全体、そして保護者、家庭、地域、東京、日本、世界、というように、点と点がどんどん繋がっていくイメージがカリキュラムマネジメントのイメージです。教育課程とカリマネとの違いについても触れると、教育課程は静的なもので、学校長の経営方針をもとに組織として作っていくもの、カリマネは動的なもので、PDCA サイクルを常に回していくものです。カリマネの中で重点になるのが、学習の基盤となる資質能力です。栄小学校では、「話す・聞く」、つまり、言語能力に焦点を強く当てました。これからさらに研究を深める機会があれば、この「話す・聞く」という能力をコンテンツとして、現代的な諸課題にどのように対応していくのかという視点も併せて取り組んでいただければと思います。

〇カリキュラムマネジメントと国語科との関連、栄小の取組について

（邑上先生）栄小の実践におけるカリキュラムマネジメントについて学べることは４つあります。１つ目は、国の方針に漫然と従うのではなく、児童の実態から、課題を設定してスタートしていること。２つ目は、学んだことを意識して次につなげる必要性。本校では、話す力聞く力の育成にまず取り組まれましたが、さらに、もう一度研究内容を見直し、他教科との関りという教科等横断的視点をもった授業を進めていかれました。３つ目は、資質・能力を、特に話すこと・聞くことの言葉の力に着目していることです。話すこと聞くことの力は全ての教科の力に、そして小学校で付けた力は必ず中学校へつながっていきます。そして、４つ目は PDCA サイクルを生かし、改善の視点・計画につなげていることです。話せるようになったが、自分の考えを伝えきれていない児童の様子から、語彙力の不足を課題と捉え、語彙力を増やす工夫を行っていました。

〇話すこと聞くことの重要性、話す力聞く力について

（邑上先生）話すこと聞くことの重要性は、簡単に言えば３つです。対話の力（聞き手の育成)、「話合いの力」に発揮される聞く力・話す力（総合力)、子供自身が言葉の力を自覚する評価です。

なお、新学習指導要領における国語科の改訂にも触れながら補足をさせていただきます。改訂により、知識及び技能、思考力、判断力、表現力という、育成を目指す資質能力が明確になりました。また、自分の考えを形成する学習過程が重視されています。さらに、「話すこと」「聞くこと」「話し合うこと」に、それぞれ「話題を設定」、「情報の収集」、「内容の検討」等が一連の流れとして入りました。つまり、自分の考えをつくる過程を大事にする必要があるということです。話すことも考えの形成、聞くことも考えの形成、そして話し合うことも考えの形成です。本校の目指す児童像は、この話し合うことによる考えの形成を大切にしてくださっているなと感じています。

（樺山先生)「話す・聞く」は、消えてなくなる音声言語なので、それをメタしていく、自覚化していくことが大切です。メタ認知とは、自らの認知を一段高い地点からモニターしコントロールする働きで、「メタ」とは、「上位の」という意味です。具体的な事例として、佐藤先生は、英単語を覚える場合を取り上げ、「上手な学習者は、時々確認テストを挟んで、どの単語を覚えて、どの単語を覚えられていないのかをモニターする。そしてその結果に応じて、覚えていない単語を重点的に復習する。これに対して下手な学習者は、例えば同じ単語を 20 回ずつ書いて、その成果を確認することもなく、勉強を終えてしまうだろう」と述べています。コントロール（＝修正）に必要なものは、メタ認知的知識です。では、うまく話せるようになりたいという子供たちに対して、どのようにしてメタ認知的知識を与えるかというと、さきほどの先生方が演じた実例なのです。良い例ももちろんですが、悪い例を見せることで、なぜその人が悪いのか下手なのかを子供たちが考えないとレベルアップしていくことはできません。

○未来を生きる子供たちに必要な力について

（邑上先生）１つ目は、相手との関係性を、言葉を通して高められる力、相手によって、ちゃんと意識して言葉を変えられる力を付けてもらいたいと思っております。２つの言葉を紹介します。平田オリザさんの本からです。「子供たちには『対話の基礎体力』をつけてあげてください。…異なる価値観と出くわしたときに、物怖じせず、卑屈にも尊大にもならず、粘り強く共有できる部分を見つけだしていくこと。…」今の子供たちだけでなく、私たち大人も必要な力ではないでしょうか。もう一つです。「…聞き手と話し手は常に交代している。…独話でも、実は聞き手が話し手と自己内対話をしているのである。話し言葉のやり取りは、話し手と聞き手の両者で成り立つのである。」これは亡き私の恩師の津田先生のご理論です。

　そして２つ目の力は、必要な情報を整理し関係づけながら活用し、言葉が持つ良さに気付く力です。話や文章に含まれている情報を取り出して整理したり、その関係を捉えたりして自分の考えに生かすことができるようになるとよいと思います。そして、「感じること」「気付くこと」「認識すること」を言葉のよさとして、さらに、「楽しんで」「幅広く」「進んで」読書することに重点を置いて、言葉の素晴らしさを感じてもらいたいと思います。

○新学習指導要領において求められる学力観や資質能力とはどのようなものでしょうか。

（樺山先生）私が一番大事に思うのは、情熱です。相手に伝えたいという思いがあれば、話す内容が稚拙でも、少し言葉が詰まっても、心は通じるものだと思います。内容や形式も大事ですが、伝えたいという気持ちを一番大事にしてほしいです。

○最後に

（樺山先生）塩見さんという心理学者の研究で、ある障害児学級に通うお子さんの話を紹介します。障害のためになかなか字を覚えることができない女の子が、神様だって読めないだろうという作文を、支援学級の先生に書いてくる。すると、先生は読んであげるのです。それが嬉しくて女の子はまた「明日も書いてくるね」と帰っていく。書くことを通して、話すこと・聞くことの相互作用が生まれているのです。最終的に、女の子の母親が亡くなるのですが、それ以来、女の子は作文に母の詩をしたため続けます。中学校に入学後、先生にこんな言葉を掛けられます。「あなたのお母さんはもう死んでしまったのよ。いつまでもお母さんのことを考えていないで、前向きになりなさい」。それ自体は悪いことではなかったのかもしれないのですが、彼女の心には届かなかった。それ以来、彼女の成長は止まってしまった。もう彼女は詩なんか書かないと思ったのだそうです。この話を通じてお伝えしたいのは、「話す・聞く」という世界で、人の話を聞くことは「傾ける」の「聴く」です。心をこめて他者の内なる声を聞こうとする人でいてください。